

ゴクのダルモータラ批判

——消滅の無原因性をめぐって——

崔 境 眞

はじめに ダルマキールティは、自著の *Pramāṇavārttikasvavṛtti* において、諸行が無常であることの根拠として、消滅の無原因性 (ahetutva) または、不依存性 (nirapekṣatva) を論じる。実在が消滅する際に実在それ自身の他に依存する原因がないことが、諸行と無常性との遍充関係を確定する根拠となるのである。さらに、PVin では、無常性を論証するための新たな論証法として、存在性を論証因とし、所証の刹那滅性を論証する、いわゆる *sattvānumāna* を述べる。この *sattvānumāna* の遍充関係を確定するために設けられたのが、反所証 (sādhya viparyaya) において論証因が存在することを斥ける「拒斥論証」(bādhakapramāṇa) である。PVin には、消滅の無原因性を論拠とする伝統的な刹那滅論証や *sattvānumāna* という新たな無常性論証が共に見られるのである。無常性を論証するためにどうして2つの論証法が説かれねばならなかったのかという問題は、後の注釈家たちによって議論されることになる。その中でも、PVinT を著したダルモータラの理解については、Sakai [2011] 等の酒井真道氏の研究によって明らかになった。ダルモータラは、拒斥論証に対して想定され得る論理的非難の余地を排除することが、不依存性または無原因性を述べる目的であり、言い換えれば、不依存性または無原因性は、拒斥論証に対して補助的な役割をするものであると主張するという。ダルマキールティの PVin 及び、ダルモータラの PVinT のチベット語訳を行ったゴク・ロデンシェーラブ (1059-1109) は、自著の PVin の注釈で、上記のようなダルモータラの理解に対して、PVin の実際の内容と矛盾していると非難している。

本論文では、ゴクの注釈に基づいて、PVin の無常性論証に関して、ゴクとダルモータラの解釈が異なるようになった経緯を明らかにすることを目的とする。以下に検討するゴクの陳述に基づくと、次のようなプロセスを経て、ゴクがダルモータラを批判することになったと推察できる。まず発端は、「無常性論証の遍充関係を論証するものは何であるのか」という問題である。無常性論証の

遍充関係を論証するのは、ダルモータラによれば拒斥論証であり、これに対してゴクによれば無原因性に基づく論証であるという。その次に発生した相違点は、「ダルマキールティがPVinで無原因性を説いたのはなぜか」という問題に対する両者の理解に関するものである。ダルモータラはそれを、拒斥論証の論理的欠陥を排除するためであると言うが、これに対してゴクは、無常性論証の遍充関係を確定するためであると語る。ゴクにとって拒斥論証は、無原因性を説明する論証の一部に過ぎなかった。そして最終的には、PVinの無常性論証全体に対するそれぞれの解釈に相違が生じたのである。ゴクが理解する限り、ダルモータラは無常性論証全体において拒斥論証が中心になると見たが、ゴク自身は中心になるのは無原因性であると解釈した。ゴクの解釈に従えば、ダルモータラの主張は、PVinが述べる内容と矛盾しており、それゆえゴクはダルモータラを批判せざるを得なかったと考えられる。

以下ではまず、ゴクがダルモータラの見解を紹介している箇所を挙げ、ゴクが理解したダルモータラは無原因性補助説を考察する。その上で、ゴクのダルモータラ批判を検討し、PVinの無常性論証に対する両者の見解の相違を指摘したい。

1. ゴクが見たダルモータラは無原因性補助説 ゴクによると (*dKa' gnas rnam bshad*, 81b7-82a3), ダルモータラは、次のような2つの目的から、PVinで消滅の無原因性が説かれたと理解していたようである。2つの目的とは、①生起の原因以外の原因を否定するため、②消滅が、限定されたある特定の生起の原因に依存することを否定するため、という2つである。ゴクは、そのうち、目的①は、無原因性が拒斥論証に対して補助的な働きをするものであることを示し、目的②は、遍充関係を論証するものすなわち拒斥論証そのものを示している、と理解している¹⁾。続いてゴクは、ダルモータラがPVinのどの箇所に対して上記のように理解しているかを指摘する。目的①は、PVin 1&2の76,14から80,9までにおいて述べられており、目的②は、80,9から81,12までにおいて述べられているという。このように、ゴクがPVinの各箇所とダルモータラの主張との対応を指摘していることは、後につづくゴク自身によるPVinの解釈と対照的である点で重要である。

以上のように、ゴクから見たダルモータラは、無常性論証の遍充関係を確定するのは拒斥論証であり、消滅の無原因性による論証は、拒斥論証を確定的な論証にするために補助的に働くものと主張している。そのため、ダルモータラ

は、無原因性のみが話題となっている部分からも、拒斥論証との関連性を見出そうとしているという。

2. ゴクの批判——PVin の内容と矛盾している—— これに対してゴクは、消滅の無原因性に関して、ダルモータラとは異なった理解を持っていた。そのため、PVin の同じ文章を前にしても、ダルモータラとは異なった解釈を提示しており、結果的に、ダルモータラの見解は PVin の実際の内容と異なっていると批判する (*dKa'gnas rnam bshad*, 82a3-82a5)。ゴクは、ダルモータラが無原因性補助説を見出した箇所（目的①に対応する部分）と同じ箇所を2つに分ける。

そのうち、無常性論証の冒頭に当たる PVin の第2章第53偈から77,9までの部分は、無原因性による論証を要約して示しているのであり、それ以下は、同じことを詳しく説明していると主張する (*bKa'gnas rnam bshad*, 81b5-6)。ダルモータラは、この箇所に拒斥論証との関連性を見出したが、ゴクは、無原因性による論証そのものが語られているに他ならないと理解したのである。

一方また、ダルモータラは、消滅の無原因性を語る目的②に対応する部分の PVin 1&2 の80,9以下において拒斥論証そのものが述べられていると考えていた。これに対してゴクは、その箇所が消滅の無原因性を詳説しているだけであると考えるので、限定された原因の否定は拒斥論証そのものを示すというダルモータラの解釈も斥ける。

続いてゴクは、無常性論証の遍充関係は拒斥論証によって論証される、というダルモータラの主張を否定する。ゴクによると (*dKa'gnas rnam bshad*, 82b5-82b7)、PVin に実際に述べられているのは、無原因性による論証が、所作性と無常性との遍充関係を肯定的に証明する妥当な認識であるということである。さらに、そのものを生起させた原因の中に特定の消滅の原因がないことを否定することも、その同じ遍充関係を論証しているに他ならないという。ゴクから見れば、ダルモータラの無原因性補助説は、PVin の内容と矛盾していたのである。

以上のように、ダルモータラが無原因性補助説を考えた PVin の箇所と全く同じ箇所に対して、ゴクはダルモータラとは異なる観点で理解していた。ゴクにとって、PVin における無常性論証における主要な論題は、「無原因性の論証による」遍充関係の確立であり、無原因性は、他でもなく無常性論証の遍充関係を確定するために説かれたのである。それゆえ、ゴクは、無原因性が拒斥論証に対して補助的な役割をするというダルモータラの主張を批判することになったと考えられる。

おわりに 以上、ダルマキールティの PVin において説かれる消滅の無原因性による論証に関して、ゴクが理解したダルモータラの主張と、それに対するゴクの批判を考察し、ゴクがダルモータラの主張に対して批判することになった経緯を考察した。両者が理解を異にする根底にあったのは、無常性論証の遍充関係を確定するのは何かをめぐる見解の相違であったと考えられる。ゴクが理解したダルモータラは、拒斥論証こそが無常性論証の遍充関係を確定するものであり、そのため、無常性論証の冒頭部分に述べられる無原因性は、拒斥論証を浄化するものとして補助的に働くものであると主張している。一方、ゴク自身は、無原因性による論証こそが、無常性論証の遍充関係を確定するものであると主張する。それゆえ、PVin の無常性論証全体を通して、無原因性または不依存性こそが無常性論証の遍充関係を確定するための有効な論証であることが、まずは簡略に、そしてその後には詳論されているというのである。ゴクにとって拒斥論証は、無原因性を説明する中で、必要に応じて敷衍的に述べられる論証にすぎなかったと理解されたようである。以上によって、結果として無原因性と拒斥論証の双方を含む PVin の無常性論証全体に関して、ゴクとダルモータラとの間に解釈上の重要な相違が生じることになったと推察される。

1) このようなゴクのダルモータラ説に対する分析は、Sakai [2011: 4.2.1. Two interpretations of *ahetutvā*] に示されたダルモータラの主張と構造的に一致している。

〈略語〉

bKa' gnas rnam bshad (rNgog Blo ldan shes rab, *Tshad ma rnam nges kyi dka' gnas rnam bshad*, *bKa' gdams pa'i gsung 'bum*, vol. 1); PVin 1&2 (Dharmakīrti, *Pramāṇaviniścaya*, Ernst Steinkellner ed. *Pramāṇaviniścaya, Chapters 1 and 2*, 2007); PVinT (Dharmottara, *Pramāṇaviniścayaṭīkā: Dharmottaras Erklärung von Dharmakīrtis kṣaṇikatvānumāna*, Part 2, Texte und Materialien 1, Dissertation, Universität Wien, 2010); Masamichi Sakai 2011. "Śākyabuddhi and Dharmottara on the Inference of Momentariness Based on the Absence of External Causes of Destruction." In *Religion and Logic in Buddhist Philosophical Analysis: Proceedings of the Fourth International Dharmakīrti Conference, Vienna, August 23–27, 2005*. Edited by Helmut Krasser, Horst Lasic, Eli Franco, and Birgit Kellner, 407–421. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.

〈キーワード〉 Dharmottara, rNgog Blo ldan shes rab, 消滅の無原因性, *bādhakapramāṇa*
(東京大学大学院)